

やなぎむねよし
柳宗悦を魅了した民家
「大谷石屋根」のたたずまい

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

大谷石建築といえば、旧帝国ホテル本館が思い出され、設計者のアメリカ人、フランク・ロイド・ライトが注目される。ライトは、大谷石の持つ軟らかい質感に魅了されたのである。一方、大谷石で葺いた屋根、いわゆる「石屋根」にぞっこん惚れ込んだ者がいる。民藝運動の創始者である柳宗悦である。柳は濱田庄司、河井寛次郎などとともに民藝運動を広めた中心的人物である。柳は濱田の住む益子や鹿沼、日光を度々訪れた。そのたびごとに大谷石屋根の民家に心を惹かれという。柳は「工藝第六十五号」の中で「長屋門の美しさもその一つだが、私にはことのほかその地方の民家で用いる石屋根が美しく想えた。これだけ形が確かで、しかも美しい屋根を見たことがない」と石屋根を絶賛している。

石屋根に魅了された柳は、石屋根の構造、分布、建築の歴史等を詳しく知りたかった。ところが逢うどの建築家にたずねても皆知らないという。これほど特徴のはっきりした日本の屋根は無いはずであるが、どの建築史家も語ったことが無いのはむしろ不思議に思えたともいう。そこで柳は建築には素人ではあるが自分たちで調査し、石屋根のことを広く紹介しようと思ったのである。そのためには調査が必要である。かといって柳自身が調査する時間的余裕はなかった。濱田庄司に、調査を引き受けてくれる者を探してほしいと依頼したのである。白羽の矢が当たったのが塚田泰三郎であった。

塚田泰三郎は、調査を依頼された昭和十年当時三十八歳、気鋭の小学校教師であった。民藝に興味関心が高く、益子に濱田庄司の存在を知ると益子まで出かけ濱田庄司に師事し、民藝運動に係り、和時計の研究者として知られる。

謹厳実直な塚田は、柳宗悦の期待に見事に応えた。その結果は先の「工

藝」において「石屋根の家」として詳しく紹介されている。この中で塚田は、石屋根の歴史、石屋根に用いられる石材、その石材の採掘方法、屋根石の種類と大きさ、屋根下地の構造、屋根石の葺き方、屋根石の運搬、石屋根の分布等について述べている。塚田のおかげで石屋根の実態が明らかにされたのである。

石屋根にぞっこん惚れ込んだ柳は、ついには石屋根の長屋門を買い求め自宅にしてしまふ程であった。宇都宮市野沢の日光街道沿い中山歌三郎氏の長屋門が売りに出されていたのを、濱田や塚田の斡旋で手に入れたのである。昭和九(一九三四)年、石屋根の長屋門は東京駒場に移築された。現在の日本民藝館附属館がそれである。また、昭和十二(一九三六)年、自邸の向かい側に日本民藝館本館を建設した際には、大谷石を床石などにふんだんに取り入れた。

こうした柳宗悦の大谷石屋根に対する関心は、ライトのそれとはまた異なつた大谷石建造物に対する新たな関心を引き起こした。日本広しといえども石瓦で屋根を葺く所は稀である。石屋根は、栃木県を代表する独特な建築物である。

柳によつて高く評価された石屋根が今、次々と瓦に葺き替えられなくなりつつある。草葉の陰で柳は、そうした状況をどう思っているであろうか、想像に難くない。



農家の象徴 石屋根の長屋門
(現在瓦葺)



日本民藝館の長屋門